九月総評　　立花開

ある夜の長さは海へ向かわせる　　郡司和斗　茨城県

誰の夜も等しく朝へ向かうけれど、心が同じように朝の方角へ迎えない夜は多い。近所のコンビニでも会いたい人のもとでもなく、海へ行かなければならない程「ある夜」は主体にとって長かった。海の広さがどこまでをかき消してくれるのかは分からないけれど、衝き動かされる衝動はいつだって受け止めてくれる。「向かわせる」という俯瞰は激情を覆い隠す無表情のようだ。

これが骨だよと教えてくれたよね
油性のマジックみたいな声で　　まちりこ　埼玉県

聴覚はいつだって受動的で音の拒否をすることができない。その一方通行さは暴力的ですらある。消したくないものを書くとき油性マジックを使用するけれど、声の比喩に使われると自分の領域を踏み荒らされるような不快感を覚える。何の骨だろうか。消せないような声で骨の在処を教えられてしまった。

くちびるが夜の広場をさかなでる　　松下　誠一　東京都

「くちびる」にはそのものだけでなく当たり前に他の肉や骨が付属する。けれど「夜の広場」を逆撫でたのは「くちびる」という部位だけ。他の部分が夜に溶けるように“私”の意識から剥がされていく。昼間の熱気がたまっている埃っぽい夜の広場に、少しの湿り気をもたらした「くちびる」。

風に色なんてないなんて泣くなよ　　杢いう子　佐賀県

人の涙の求心力はすごい。思考する力も自分の輪郭も、窓に張り付いた雨水が融合するように泣いている相手の激しい心に取り込まれてしまう。「…なんてないなんて泣くなよ」のしどろもどろの句跨りが面白い。次々落ちて来る涙のような「な」。

舷窓の強化硝子に守られて
留守にした子宮を思い出す　　大嶋　碧月　　兵庫県

渡航する機会があったのだろう。臓器としての「子宮」は体内にあるけれど、機能させるための（すなわち子供をつくるための）意思は置いてくる必要があった。「強化硝子」の内側に入った今、もう何処へも飛ばすことが出来ない想い。それでも行かなくてはならない時。

リビングで
いつかお昼寝をしようよ
ひとりぼっちになるまで待つよ　　詩央えみる　大阪府

"一緒になれるまで"ではなくあなたが「ひとりぼっちになるまで」という蟻地獄の底のような仄暗さ。おそらく主体はいつまでも待っているだろう。望むのは昼寝をする暖かい空間のはずなのに、温度が感じられない。呪いのような愛は自分をこそ冷してゆく。落とし穴のような恐ろしさ。

保冷剤首に巻きつけ駅までは
ショートケーキのつもりで歩く　　汐見りら　　東京都

速く歩くと止まったときどっと汗をかいてしまうから、移動中はできる限り最小限の運動量を保ちたい。そのときの緊張感は、たしかにケーキを運んでいるときに似ている。柔らかく甘い「ショートケーキのつもり」の足取り。いつも何かを演じながら生きることができたらきっと毎日が楽しい。

箸を何膳も並べて
ひとりをふやかす　　てふの雀　　愛知県

孤独は没頭するほどに自分が研ぎ澄まされていくけれど、その鋭角は自分のことも刺してしまう。「ひとり」であることには変わりはなくても、少しごまかす時間が自分を端切れのようにしなくて清むのかもしれない。感情に触感を生む「ふやかす」や漢字と平仮名の対比が面白い。

ハンモック舌の窪みに触れている　　神崎まい　　群馬県

自分の腔内か他者のものかによって変わる奥行きの向き。おそらくハンモックに寝転ぶ自身のことだが、明言されていない故に舌の行方を楽しむ余白がある。まるで腔内の奥に見上げた空が繋がるような、触覚のみだからこそどこまでも広がる領域がある。空の味がする「舌の窪み」。もしくはあなたの「舌の窪み」ならば、目を閉じてその温もりにハンモックのように身を任せている。

霜取りが楽しいことも
年収が増えれば
思い出さなくなった　　香取小春　　宮崎県

何も持っていなくても許される時期が人生にはある。いつまでも霜取りを楽しくてたまらないと思い続けることはできなくて、安定と引き換えに少しずつ失っていく心の自由さ。けれど「思い出さな」いだけで、まだある。いつかまた、思い出す日は来る。